

医系技官「原点」探訪

ポンペ

昨年度のパンフレットでは、「伝説の医系技官」として、長与専斎と後藤新平をご紹介しました。皆様から大きな反響をいただいたこともあり、今回は、さらに掘り下げて、日本の医療や医系技官の「原点」ともいべき人物とそのエピソードについて、ご紹介できればと思います。

さて、西洋医学発祥の地といわれる長崎から探訪ははじまります。医系技官でもある中山鋼教授(写真)は、その原点である長崎大学医学部に教授として出向しています。はじめに、この写真にも写っている幕末に来日したオランダ人医師のポンペの言葉を紹介します。

「医師は自らの天職をよく承知していなければならぬ。ひとたびこの職務を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものではなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら、他の職業を選ぶが良い。」

これがまさに、ポンペが伝えた西洋医学の真髄でした。



中山鋼教授
(長崎大学医学部にて ポンペのレリーフとともに)

Pompe

1857年11月12日(安政4年9月26日)、ポンペは、幕府が作った医学伝習所において日本初の系統だった西洋医学を教えることになりました。この日こそ、我が国における近代西洋医学教育が開始された日であり、現在長崎大学医学部の開学記念日になっています。

ポンペの下では、「衛生」という言葉を造った長与専斎らが学び、彼らは我が国における近代西洋医学・公衆衛生学の発展に大きな役割を果たすこととなります。ポンペは、ひとりで基礎医学から臨床医学までを体系的に講義を行うとともに、我が国初の西洋式の病院で、患者の身分にかかわらず診療を行いました。冒頭の言葉にもあったとおり、ポンペは、「医学」の知識だけではなく、医師としての覚悟をも我が国へ伝えたと言っ て良いでしょう。



ヨハネス・レイディウス・カタリヌス・
ポンペ・ファン・メルデルフォールト
Johannes Lijdius Catharinus Pompe
van Meerdervoort, 1829年 - 1908年
(長崎大学附属図書館所蔵)

Sagara Chian

相良知安

続いてご紹介する佐賀藩出身の医師相良知安は、明治初期に我が国へのドイツ医学の導入に尽力し、医学制度の創設に貢献していますが、同時に医系技官の原点というべき人物であることは意外と知られていません。知安は、1861年に佐倉順天堂塾に入門しオランダ医学を学び、1863年には長崎養成所(後の「精得館」、長崎大学医学部の前身)に進み、ポンペの後任として来日したオランダ人医師ボードインより医学を学びました。

1869年には、明治新政府より「医学校取調御用掛」として医学制度改革を命じられ、大学東校(東京大学医学部の前身)の改革にあたり、1873年には、初代文部省医務局長に就任しました。この当時、ドイツ医学が世界で最も優れていたことから、ドイツ医学導入に奔走しました。

江戸時代以前の日本では、体系的な医学教育が行われることなく、伝統医学・蘭学に基づく師弟制度により、その技術が伝達されていました。当時の日本においては、体系的な医学を学んだ「医師」が全国にいないこと、これが医療における最優

先の問題でした。その後「医務局」は、医学教育分野を文部省に残し、明治8年(1875年)に創設された内務省衛生局に引き継がれることとなります。ちなみにその内務省衛生局初代局長が長与専斎で、その後継が後藤新平です。そして昭和13年(1938年)、内務省衛生局、同社会局が前身となって厚生省が誕生します。こうして、医師であり行政官である医系技官の系譜と、相良知安の築いた、ドイツ医学の導入から始まった我が国の医療制度は、今も脈々と息づいているのです。



相良知安
1836年 - 1906年
(中央公論新社「医学生とその時代」より)